

## 【いちご（ハウス促成土耕栽培）】

### ①栽培こよみ

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
普通促成												
夜冷促成												

G:ジベレリン処理 O:定植 P:ポット育苗 マ:マルチ n:トンネル ■:収穫 ---:育苗期間 ——:本圃期間

### ②栽培のあらまし

#### (1) 施肥

施肥名	施用量	備考
有機石灰	120	N: 23.6
有機化成肥料	200	P: 29.2 K: 27.6
蒸製毛粉	160	Mg: 9.6
草木灰	80	Ca: 57.6
米ぬか	100	蒸製毛粉以下
焼成骨粉	20	5品でぼかし 肥料を作る

#### (2) 育苗

基本的には炭そ病回避のため育苗全期間を通じハウス内で管理します。

11月に親株（フリー苗）を購入し、ハウスサイドを開け、外気温にさらした状態で管理します。灌水は週1回程度、防除は月1回程度行います。

3月下旬から大型プランターに鉢上げし、親株の充実を図ります。5月下旬には培土の肥効が切れてくるため、追肥を行います。6月上旬にランナーをポットに鉢上げします。ポットは最低でも直径9.0cmとします。揃ったランナーを発生させ、葉が3枚時に切り離してポットに植えつける方法と、ランナーをポットに固定して直接ポットに発根させる方法があります。前者は苗の運搬、灌水労力が少なく小型ポット育苗に向き、後者は植え傷みがなく随時ポットを置くことができますが、苗の揃いが悪い、運搬労力が大きい等の欠点があります。

7月下旬に親株から切り離し、ポットとポットの間隔は5cmとします。玉肥をポットに入れます。クラウン径は1cm以上を目指します。入れない場合は様子を見て液肥で追います。葉数は3枚程度に保ちます。

さちのかは、8月中旬に窒素切り処理を開始し、9月初めには体内窒素濃度が100ppm程度になるようにします。

特に猛暑の年で遮光したい場合は梅雨明け～8月中旬まで20~30%カットの遮光を行います。

### (3) 定植準備

梅雨明けから最低20日以上、太陽熱消毒を行います。8月上旬には荒耕を行い8月中旬には有機質資材を中心に投入します。

### (4) 定植

施肥、耕耘、畦立ては早めに行い、花芽の分化を確認したらすぐ定植できるようにしておきます。畦幅120~130cmで2条植え、畦高25cm以上とします。条間は25cm、株間は電照する場合は23cmそれ以外は20cmとします。花芽が外側に出てくるように定植します。定植後は十分に灌水し活着を促します。

肥料が効き過ぎると乱形果を誘発し、定植が遅れると芽なし株となるので注意します。

### (5) 定植後の管理

出蕾するまでにマルチを掛けます。マルチ後の灌水は、11月は10日に一度、12~1月は1週間に一度、2月下旬から4月上旬は5日に一度、4月中旬以降は3日に一度、水が滲み出るくらいの量とします。

10月20日を目安にビニール被覆を行い、最低気温が17℃を切ればサイドの開閉を行います。開花したらミツバチを入れ、果実に光が当たるように玉出しを行います。

11月15日頃から3月まで電照を行います。100V、75Wの電球を葉上1.3mの高さに3.5mの間隔で設置し、10分間/時間の間欠照明とします。

ハウス内気温が5℃を切れば暖房を行います。暖房機がない場合は二重カーテンなどで保温に努めます。

ランナー、出荷できない小果、変形果、病果、収穫の終わった果梗は速やかに取り除きます。葉数は13枚を目安として古葉を除去し、株元を清潔に保ちます。

頂花房の花梗を伸ばすためにジベレリン処理を行います。1株あたり8ml出蕾株率30%の時10ppm、80%の時5ppmを株の中心部にかけます。腋花房、第3花房はそれぞれの出蕾時に5~7ppmで処理します。

## (6) 親株の管理

親株床は排水のよい圃場を選び、土壌処理を行います。定植の10日前までに10aあたり堆肥4,000kg、苦土石灰100kg、窒素、リン酸、カリをそれぞれ成分量で10kg施用します。高畦にし、片植えでは畦幅180cm、株間70cm程度、中央植えでは畦幅250~300cm、株間50cm程度とします。親株1株あたり採苗数を10~20と計算して親株を植えます。適宜灌水、株の整理をし、病害虫防除を定期的に行います。

### ③病害虫防除

うどんこ病は育苗期から徹底的に防除します。広がる前に病葉や病果を見つけて除去します。薬剤散布は葉裏にもかかるように、十分な量(300~400ℓ/10a)を散布します。薬剤はローテーションさせます。

炭そ病は親株床から発生に注意します。雨除けハウス下で管理し、底面給水育苗を行い、頭上灌水による飛沫感染を防ぎます。また肥料の効き過ぎや遮光のし過ぎによる徒長苗は炭そ病の発生を助長するので注意します。

萎黄病は親株床での発生に注意し、罹病株は除去します。

害虫はミツバチを入れるまでに防除します。ミツバチを入れてからは影響の少ない薬剤を選んで部分散布をするか、花の少ない時期に散布、燻煙を行います。

### ④栽培上の留意点

- ・作業が遅れると最終的に収量品質に影響するので適期作業を励行します。

出典：「農業新技術百科」(2009年 兵庫県)

